

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26360004

研究課題名(和文)パプアニューギニアにおける2つの天然資源開発地における社会変化の類似点と相違点

研究課題名(英文) Similarity and difference of social change among the two natural resource development areas in Papua New Guinea.

研究代表者

田所 聖志 (Tadokoro, Kiyoshi)

秋田大学・国際資源学研究科・准教授

研究者番号：80440204

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：森林伐採の行われているテワダ人社会と、天然ガス開発が行われているフリ人社会を比較し、地域社会における人びとによる天然資源開発への適応戦略を比較検討し、その類似点と相違点を明らかにした。方法として、社会人類学の手法と人類生態学の2つの手法を統合させ、社会制度の変化と適応形態という2つの側面から検証した。その結果、特に、天然ガス開発によるフリ人社会における社会的影響の実態のいくつかの側面を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：Comparing two societies, the Tewada in which deforestation has been conducted and the Huli in which natural gas has been developed, similarity and difference of the adaptive strategies by the local people for the natural resource development was examined. We utilized combined methods of social anthropology and human ecology. As a result, we have shown some aspects of social impact on the Huli society from the natural gas development.

研究分野：文化人類学

キーワード：社会変化 資源開発 結婚 食生活 経済 婚資

1. 研究開始当初の背景

パプアニューギニアを含めたオセアニア諸国では、液化天然ガス、石油、森林伐採、金銀鉱山などの天然資源開発が行われている。これによって地域社会にもたらされる急激な社会変化については、地域住民のグローバル世界への編入や、先進国による搾取への抵抗、国民国家の枠組みとの対立といったマクロな文脈のなかに位置づける見方が主流となってきた。

国内では、小柏が、オセアニア諸国における漁業資源と森林資源に関する国家間協定の変遷について報告している [小柏 2005]。国外では、オーストラリアの May と Spriggs が、パプアニューギニアのブーゲンビルにおける鉱山開発の帰結として発生した住民と政府のあいだの武力紛争を、住民による地域主義的なアイデンティティの創出と捉える知見を示した [May and Spriggs 1990]。また、カナダの Jorgensen は、パプアニューギニアのサンダウン州での鉱山開発の結果、それまで一体感を持たなかった複数の言語・文化集団が、文化や歴史の共有を拠り所に「ミン」というエスニック・アイデンティティを創出したと指摘した [Jorgensen 1996]。

申請者(田所)は、パプアニューギニアの辺境地域に住む、本来言語学的な名称であり一体感を持たなかったアンガ系諸集団の人びとのあいだに、石油試掘をきっかけとして「アンガ」というエスニック・アイデンティティを喚起する運動を起こす人びとと、それに対して反発する人びととのあいだに相克が生まれていることを明らかにした [田所 2006]。

しかしながら、メラネシア、ひいてはオセアニアの地域社会における天然資源開発に対する地域住民の対応過程に関する理論化は、十分に進められていないのが現状である。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、森林伐採が行われているテワダ人社会と、天然ガス開発が行われているフリ人社会の比較を行い、資源開発に対する対応過程の類似点と相違点を明らかにすることを目的とした。

テワダ人社会は、集団規模が小さく、個人の自律性が強い。他方、フリ人社会は、集団規模が大きく特定の政治的リーダーの役割も発達している。本研究では、テワダ人社会とフリ人社会という異なる社会条件を持つ人びとのあいだにおける比較研究を行う。異なる社会条件のもとで、どのように地域社会が天然資源開発に対応するのかという過程を明らかにし、理論化への道筋を開くことが可能であると考えた。

3. 研究の方法

フリ人社会とテワダ人社会の2つの地域社会での現地調査を実施し、天然資源開発

による地域社会での影響の実態を把握する。2つの地域社会での現地調査は、同一の調査項目について、申請者(田所)と分担者(梅崎)が共同で実施する。当初計画していた現地調査の大項目は、下記の通りであった。

- (1) 現地での天然資源開発の状況
- (2) 人びとによる天然資源開発が行われている開発地への訪問頻度
- (3) 天然資源開発についての地域住民の語り口
- (4) 天然資源開発の開始前後の生業活動の変化
- (5) 天然資源開発の開始前後の食事の変化
- (6) 天然資源開発における親族組織の変化

上記の項目に関する現地調査で得た情報を比較し、2つの地域社会の類似点と相違点を明らかにする。

4. 研究成果

- (1) 現地での天然資源開発の状況

テワダ人社会における森林伐採の状況は、これまでの研究において概要を把握していた。居住域からやや離れた森林伐採地域に出かけて契約労働に従事する人々は、社会内部で一部であった。その一部の人々が社会内部に帰還した際に持ち込む現金が、地域社会内部で葬儀や結婚、紛争に伴う賠償の機会に内部流通していた。森林伐採は、テワダ人の保有する土地領域内部で行われているものの、居住域からやや離れていることもあって関与する人々の数が少なかった。そのため、森林伐採による地域社会への影響は、ときどき現れる帰還者による現金の持ち込みを除けば、限られたものであった。

他方、フリ人社会では、天然ガス開発によって短期間に急激な変化がもたらされたことが分かった。

天然ガス開発は、開発企業の側からすると「1. 鉱区権益の取得」「2. 探鉱」「3. 採算性の検討」「4. 開発」「5. 生産・販売」の順で行われる。このうち、地域社会への影響と直接関わるのは「4. 開発」の段階であった。「4. 開発」にあたっては、生産井が掘削され、ガス処理施設、送ガスおよび出荷関連施設が建設される。このとき、地元住民が建設作業員として雇用されるため、開発地域では現金収入を得る人が増加する。

研究対象地であるフリ人社会の居住域では、2008年に開発企業と住民、政府の間で合意がなされた。2009年に開発段階の作業が開始され、2013年に生産と輸出が始まった。2013年5月の最初の輸出先は日本の電力会社であった。住民は、2009~2013年までの建設期間中に多額の現金収入を得た。だが2016年現在、収益による利益の住民への配分はなされていない。

フリ人社会では、2009年~2013年までの建設期間中に多額の現金収入を多くの人が

得たことが、社会に対して大きな影響を与えていた。

テワダ人社会とフリ人社会における以上のような違いは、ひとつには、居住地域と天然資源開発地との間の距離によるものと考えられた。

(2) 人びとによる天然資源開発が行われている開発地への訪問頻度

テワダ人社会においては、森林伐採地への訪問頻度、特定の男性のみにおいて見られた。他方、フリ人社会においては、天然ガス開発が居住域内部で行われているため、開発地内部で生活をしてきた。

この項目は、当初、居住域と森林伐採地と居住域が離れているテワダ人社会における状況を想定して設けた項目であった。また、当初は、フリ人社会において、天然ガス開発地から離れた地域に住む集団も調査対象として想定していたためである。だが、実際に現地調査を始めたところ、天然ガス開発地から離れた場所に居住するフリ人集団を定期的に訪問する調査対象とするのは、交通が不便であるために困難であることが分かった。

そこで、フリ人社会のなかでは、天然ガス開発地に居住するフリ人社会のみを調査対象とすることにした。

(3) 天然資源開発についての地域住民の語り口

テワダ人社会もフリ人社会でも、ピジン語で開発企業は「カンパニ」(kanpani)と呼ばれていた。

テワダ人社会では、村に住むある男性は「私たちの村にはカンパニがない。森林伐採をする会社を村の近くに呼び寄せたい」という趣旨の語りをしていた。こうしたカンパニの登場を待ち望む声は、村の中でよく聞かれた語り口であった。

ただし、森林伐採に従事した経験のある男性は多少ニュアンスの異なる語りをしていた。彼は次のように語った。「(伐採地では)病院も建っているし、学校、雑貨屋もある。道路があって車も通っているから町にも行ける。でも、森は完全に壊されてしまっている。小動物なんてまるでいない。あのようなところでは米を買わないと、食べるものがないよ。」

他方、フリ人社会では、カンパニを否定的なニュアンスでも語っていた。開発が開始された時期に急激に結婚した男性が増えたとして、ある男性は次のように語っていた。「多くの男たちが金を手にして、若い者も年寄りも関係なく、女に手を出して結婚した。たくさんの男が外から来た女や出かけた先の女と結婚した。外から来た男も個々の女と結婚した。」別の男性は、現在のことを、「今はカンパニ・タイムさ」と言う。「カンパニ・タイム」(kanpani taim)とは、開発が始まった以後、フリ人社会の内部におおきな変化が

もたらされたことを表現する、現地独特の民俗概念であるように思われる。

フリ人社会では、この他にも各種の語り口を収集した。

そのひとつは、天然ガス開発が始まり、道路に敷設する敷石をつくりだす砕石機が使われ始め、砕石機の出す音によって、地元の山に住んでいた「逃げていってしまった」という。以前は、狩猟が行われていたが、現在は、狩猟を行う人は減ったという。

また、開発が始まった後、つくられた道路からの土埃がたくさん増えたという。そして、「これほど土埃が増えて、雨が降らなくなったから、あと10年もすれば、この場所は、砂漠になってしまうのではないか。」

奇妙なことに、「土地が縮む」という語りも聞いた。「以前は、ある場所に畑を3筆作ろうと思ったら作れた。家を3軒建てようと思ったら建てることができた。だが、今同じ場所に畑を3筆作ろうと思ったら、1筆しか作れない。同じ場所に家を3軒建てようと思ったら、一軒しか建てることができない」といった語りである。

このような環境の変化についての語りのなかには、神話と結び付けるものも見られた。複数の男性が声を潜めて語っていた神話があった。「以前、あの山に年寄りの男性が住んでいた。その男性は、亡くなる直前に、『私が死んだ後、しばらく経ったら、足の紅い男がやってくる。その男に火の燃え先はあげてはならない。食べものをあげてもよい。だが、火を与えたら、この土地はだめになってしまう』。このように言い残して男性はなくなった。この足の紅い男は、白人たちのことだ。そして、火は天然ガスのことだ。天然ガスを白人に渡してしまったので、この場所は、やがてはだめになってしまうかもしれない。」

以上のような語りが生じたプロセス、現地における語りの意味については、現在のところ、十分に分析を進めることができていない。今後、収集した語りのデータの文章化を進め、詳細な分析を行う予定である。

(4) 天然資源開発の開始前後の生業活動の変化

テワダ人社会においては、生業活動に変化は見られなかった。森林伐採による影響が限定的であったためであると思われる。

対照的に、フリ人社会では、建設期間中の生業活動の変化が顕著であることが分かった。建設期間中は、地域社会内部のほとんどの男性が、単純な建設作業員としての契約労働に従事したため、現金収入があった。また、女性たちも多くが、開発企業で働く従業員のための炊事や宿舎の運営に関わる業務員として雇われた。こうしたことから、現金収入を得た人々が多かったため、生業活動として従来行われてきたサツマイモ栽培はほとんど行われなくなったことが分かった。そして、建設が終了した後、また再び、従来の生業活

動を再開するという変化を辿ったことが分かった。

(5) 天然資源開発の開始前後の食事の変化
テワダ人社会においては、森林伐採が始められた前後の期間において、食事の変化に顕著な変化は見られなかった。

他方、フリ人社会では、顕著な変化が見られた。パプアニューギニア高地におけるタンパク摂取量の把握を目的として開発された食物摂取頻度調査票 (FFQ) を利用し、「1. 開発前」「2. 建設期間中」「3. 現在」の三つの時期におけるタンパク摂取量の変化について調査した。対象地域は、「A. 開発の影響を受けた地域」「B. 開発の影響を受けていない地域」である。

その結果、「B. 開発の影響を受けていない地域」では、タンパク摂取量がほぼ変化していないことが分かった。対照的に、「A. 開発の影響を受けた地域」では、タンパク摂取量が「2. 建設期間中」に顕著な上昇を示したことが分かった。

また、「A. 開発の影響を受けた地域」における食品ごとの摂取量の変化について分析したところ、「2. 建設期間中」には購入食品への依存度が高まり、サツマイモや葉野菜などの在来食品の摂取量が減少していたことが分かった。

上記の結果は、学会発表として暫定的な結果を公表した。現在も分析を進めており、また、論文としての公刊をするための作業も同時に進めている最中である。

(6) 天然資源開発における親族組織の変化

テワダ人社会において、親族組織の変化として見られたのは、土地保有集団としての組織化を目指した住民の動きであった。森林伐採企業の誘致を目的として、住民の一部が国家法で認められている土地保有集団の整備を目指す運動を始めた。パプアニューギニアの国家法では、親族集団ごとに記憶されている祖先の移住した神話にもとづいて土地保有が正統化される。そのため、祖先の移住神話を、異なる親族集団が打ち明け合うという、以前は考えられなかった現象が生じた。祖先の移住神話は、その親族集団が特定の土地を保有する正統性を保証するものであり、その内容は、他の親族集団の成員に対して打ち明けられることは、これまで決してなかったからである。

一方、フリ人社会では、親族組織の変化は、顕著な変化が見られなかった。だが他方で、結婚の際に夫方親族から妻方親族へ贈与される婚資の内容の変化が見られた。

フリ人社会では、従来、貝のネックレスや儀礼の時に身体に塗る植物油といったモノや、複数のブタが婚資として用いられていた。

フリ人社会の調査村において家系図調査を行い、家系図に現れた男女の結婚時に贈与された婚資の内容について聞き取り調査を

行った。対象人数は178(男性107、女性71)であった。その結果、1990年頃から従来の主な婚資であったブタの量が徐々に減少し、現金の使われることが多くなったことが分かった。また、貝のネックレスや儀礼の時に身体に塗る植物油といったモノは、1960年代までにほとんど使われなくなったことも分かった。

注目すべきは、2009年の資源開発の開始時期に、ブタの量が急激に減少し、変わって現金が婚資として使われる傾向が強まったことが分かった。だが、建設終了後(2013年)以降、婚資として支払われる現金の量が減り、再び婚資として贈与されるブタの量が増加した傾向も見られた。

このことは、資源開発において発生した現金の多くが、結婚にあたる婚資として消費されたことを示すものである。

従来のパプアニューギニアの天然資源開発地を対象とした研究では、資源開発によって生じた現金が、開発地社会に大きな混乱を引き起こすという点が強調されてきた。そのことは、今回調査したフリ人社会にも当てはまる。だが、それと同時に、その混乱は、結婚という社会関係の拡張として転換されたという側面もあることを示唆している。

今後は、上記の論点についての論考を準備することを予定している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 田所聖志「書評：卯田宗平著『鵜飼いと現代中国：人と動物、国家のエスノグラフィ』東京大学出版会、2014年、367ページ」『アジア経済』57巻4号(頁98～102)、2016。【査読あり】
2. 田所聖志・夏原和美・田口貴久子・柳生文宏「高齢者集落における社会的紐帯と健康状態の関連への文化人類学からのアプローチ：秋田県男鹿市A地区B集落での予備調査から」『日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要』21: 1-11、2017。【査読あり】

〔学会発表〕(計5件)

1. 田所聖志「パプアニューギニア、ポートモレスビーにおけるフリ人移民の人口流動」国立民族学博物館共同研究「エージェンシーの定立と作用 コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望」国立民族学博物館、2014年12月。
2. Kiyoshi Tadokoro. "Views of the Body and Eating Pandanus in Papua New Guinea." The Locality of "Health":

Traditional/ Folk Medicine, People's Health and the Environment. 京都国際会館, 2015年03月.

3. 田所聖志, 梅崎昌裕 「パプアニューギニア高地における天然ガス開発が人々の食生活に与えた影響」日本オセアニア学会第33回研究大会、2016年03月、神奈川県三浦市。
4. Kiyoshi Tadokoro, Masahiro Umezaki. The impact of natural gas development on dietary transition among subsistence farmers in the Papua New Guinea Highlands. 応用人類学会第76回研究大会、2016年03月～2016年04月、Vancouver.
5. 田所聖志 「天然ガス開発地における結婚の変化 パプアニューギニア、ヘラ州における調査から」日本文化人類学会第51回研究大会、2017年5月27日-28日、神戸大学。

〔その他〕

1. 田所聖志 「異文化の人々を理解する方法 文化相対主義という考え方」『フォーラム』33巻 頁3～5、2014年10月。
2. 田所聖志 「未婚男性住む若者小屋 パプアニューギニア」、『読売新聞(夕刊)』(頁2)、2015年05月。
3. 田所聖志 「鉱山跡の産業テーマパーク」『月刊みんぱく』国立民族学博物館2015巻8号(頁8)、2015年08月。
4. 田所聖志 「結婚はひとりの始まり パプアニューギニア」、『読売新聞(夕刊)』(頁2)、2016年01月。
5. 田所聖志 「[超入門!]文化人類学のフィールドワーク 「プロのよそ者」になるための独学3ステップ」『フォーラム』36巻 頁4～7、2017年04月。

ホームページ等

<http://www.gipc.akita-u.ac.jp/~tadokoro/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田所 聖志 (TADOKORO, Kiyoshi)
秋田大学・大学院国際資源学研究科・准教授
研究者番号：80440204

(2) 研究分担者

梅崎 昌裕 (UMEZAKI, Masahiro)
東京大学・大学院医学系研究科・准教授
研究者番号：30292725